

学力の基礎をきたえ どの子も伸ばす研究会ニュース

NO. 351

学力研の広場

2024. 6. 7

学 力 研 発 行

常任委員長 岸本ひとみ

ホームページアドレス <http://gakuryoku.info/>

郵便振替 00920-9-319769

8月4日の全国フォーラムで『スマホはどこまで脳を壊すか』の著者である榎浩平氏が記念講演をされます。私も『スマホは…』を購入し読みましたが、スマホがいかかに子どもたちの学びを阻害しているか多くの研究結果から知って、驚きました。

GIGA スクール構想がコロナ禍の影響で繰り上げで推進されることになった時、「(これだけ環境を整備するのだから) タブレットを使わないという選択肢はない」と言われました。そして学校現場に一人一台のタブレットが導入され、早いものでもう約三年が経過しましたが、その間の実践で見えてきたものはメリットばかりではないと思います。タブレットを使うことが当たり前になったことで失われてしまった大切なものもあるはずです。「どの子も伸ばす」という視点をもち日々の教育実践に当たってきた学力研の教師だからこその気付きもあることでしょう。

我々教師は、目の前の子どもたちの学びに、そして将来に対して責任を負っています。タブレット学習のメリットだけでなくデメリットも理解し、その上でより良い教育に向けてどのように活用していけば良いのかを考えることはとても大切なことのはずです。(堀井)

CONTENTS

◇特集 タブレット学習が壊したものは◇

タブレットによって私たちは何を失いつつあるのか	堀井克也	2
タブレット学習のデメリットについて考える	吉田雅直	4
タブレット学習で失ってはいけないもの	小川慶子	6
子どもの発達に資するのは～1人1端末 その功罪～	岸本ひとみ	8

◇連載◇

「どの子も伸ばす」を本気で考える 68 「意欲格差」に負けない! 公立小学校へ	岡本美穂	10
考える力をつけるための授業の組み立て方④理科からこそ理由を書かせる	荒井賢一	12
社会科(歴史)授業力アップ講⑤教材研究⑤	深澤英雄	14

神奈川学力研の紹介 湯浅文・新倉智行 16

局長・常任委員長だより 19

学力研カレンダー 20

タブレットによって私たちは何を失いつつあるのか

春日井学力研 堀井 克也

デジタル化の流れは不可逆的なのか？

最近、ある方の紹介でこんなニュースを知りました。

教育先進国と言われる北欧諸国の一角、スウェーデンでは、社会全体のデジタル化が進展するのに伴って、教育のデジタル化も推進されてきました。二〇一〇年代の前半から、学校は子どもたちにデジタル・ツールを使う機会を与え、学習に役立たせることが期待されてきました。例えばスウェーデンのソレントウナ市は、二〇一〇年にタブレットやPCを一人一台付与する計画を進め、紙の教科書を原則として廃止するなどしていきました。

ところが二〇二二年に政権交代が起こり、新しく学校担当大臣に就任したロッタ・エドホルム氏がこの流れを逆行させました。近年の学校現場のデジタル化は行き過ぎていると批判し、見直しを求めたのでした。

具体的には、タブレットを使った自主的なオンライン調査やキーボード操作の練習時間を減らし、「静かに本を読む・手書きの練習をする時間」に重点が置かれるようになったり、六歳未満の子どもたちのデジタル学習を完全に止める計画を立てたりしているそうです。その背景には、スウェーデンの児童の読解力の低下があるそうです。

スウェーデンのICT教育が失敗だったと決めつけるのは時期尚早だ、という意見もあるようですが、このような流れが世界に生まれつつあるという事実は、我々にとって示唆深いのではないのでしょうか。国際学習到達度調査(PISA)の調査でも、学校でコンピュータの使用が長くなればなるほど、数学の成績も文章読解力も下がっていたそうです。日本は教育のデジタル化後進国だと言われて久しいですが、それも一概に悪いとは言えないようです。

子どもたちが失ったものは何か

私は初任の頃から校内の情報主任をずっと務めてきたこともあり、ICT活用について書籍を読んだり研修に参加したりして学ぶ機会もそれなりに多くありました。また、校内のICT活用を推進する立場でもあり、効果的な活用法を校内研修の場で紹介することもありました。ただ、その際も学力研の「どの子も伸ばす」という理念を忘れずに、格差を助長したり学習を子ども任せにしたりしないよう意識してきましたつもりです。

このところ、「個別最適化」の流れと共に「児童がタブレットを文房具のように自由に使えるようにすること」が大切だという言葉をよく耳にするようになりました。「先生、鉛筆使っていないですか？」と子どもがいちいち確認することはありません。それと同様に、「先生、タブレット使っていないですか？」と教師に確認することなく、子どもがタブレットを使いたいと思った時に自由に出して使えばいいのではないかと、思うのです。メリットも感じる反面、デメリットも大きいのではないかと思います。

最近参観したタブレットを活用した授業の中で、気になっていることがあります。それは、タブレットの画面が視野に入っているとそちらが気になってしまい、教師や友達の話の聞けなくなってしまう子供も私たちの姿です。中には、堂々と教師や友達の話を見無視して、自分のしたいことを続けている子どももいました。これを、個別最適化と呼ぶのか、主体的に学んでいる子どもと云っていいのかは疑問です。

仲間と教室に集い、共に学ぶ最大の意義、価値は何かと考えると、一人で学ぶよりも多くのことを学べることではないでしょうか。自分にはない興味や関心をもった仲間から刺激を受けたり、自分とは違う考えの仲間に触れて考えが広がったり、質問してもらうことで考えが深まったり：そうしたダイナミックな学びが生まれるためには、何よりも「聞く」ことが求められます。タブレットが目の前にあると、その大切な「聞く」ことがおろそかになるのではないかと思うのです。だから私は、対話の場面では必ず画面を閉じるように指示しています。子どもの「聞く」力を育てるためです。

もし、ちゃんと聞かずに自分の好きな事をしていていいという状態が許され続けていくなら、その子は「聞けない子」になってしまおうでしょう。これは教師としての肌感覚の話になってしまっているのですが、賢い子、伸びていく子はどの子も「よく聞ける子」でした。その真逆をゆくような子どもを育てるようなことは、したくありません。

教師が失ったものは何か

我々教師の側に目を転ずれば、タブレットの導入によって大切なものが失われつつあることも気になります。それは、これまで日本の教育を長く支えてきてくださった、ベテランの先生方の尊厳です。

先述のように情報主任をしていると、先輩方にPCやタブレットの使い方について尋ねられることがたくさんあります。そんなとき、皆さんとても申し訳なきようにしておられるのが、とても気になります。「使わないという選択肢はない」という圧力が、ICT活用に苦手意識がある先生方の心を悩ませ苦しませ、追い詰めているのではないかとこの危惧があります。これは、子どもにとっても良いことはありません。

また、これも個別最適化の流れに伴って起きていることだと思えますが、ベテランの先生方の磨いてこられた子どもたちの学びを指揮する力、一斉授業の技が軽視され、「古い授業スタイル」と断じて、タブレットをもっと使った新しい授業をするよう迫る空気が、先生方の尊厳を傷つけています。とある職場の先輩が、保護者と授業の進め方について対話している中で、「もっと新しいことも取り入れていかないと、とは思っているけど、なかなか難しくて：」と言われているのを聞いて、私はなんだか釈然としない感覚を覚えました。

また、若い教師は若い教師で、子どもたちを学級として、学ぶ集団として組織する技が大切にされていない現状から、そうした技を学ぶ機会を失いつつあるのではないかと危惧しています。個別最適化どころか、個が分断された状態を招いていないか、授業の様子を気を付けて見ていかないといけないと思っています。

何が良い教育なのか、そのために何が必要なのか、タブレットはどう使うべきなのか。一人ひとりが、考えていくべきです。

タブレット学習のデメリットについて考える

大阪 吉田雅直

小学校教育におけるタブレット学習の最大の問題点は、タブレットを「使うこと」そのものが目的化してしまっているということであり、そのことに誰も異を唱えない、反論できない、この異常な空気感ではないでしょうか。これまでも、書画カメラや電子黒板など様々なICT機器が導入されてきましたが、便利な機能は使えばいいし、使いにくければいまままで通りの黒板とノートでいいという選択ができました。しかし、タブレットが導入されてから「従来の方法以上の教育効果が得られるのか」「デメリットはないのか」ということに対する考察もなく、「タブレットを積極的に活用する授業はすばらしい」「いまだに黒板とノートだけで授業をしているのか」という雰囲気がある現場を支配しているように感じます。もちろん、タブレット学習のメリットも否定できません。タブレットによって救われる子も

いると思います。「働き方改革」に一役買っていることも（研修などで忙しくなっている反面もありますが）確かです。しかし、タブレットによって教育が「はやい」「かんたん」「らく」な方向にどんどん流されて行っている気がするのです。そして、最近では、それが「子どもたちにとって」ではなく、「教師にとって」に置き換わってきていることに危機感を感じています。たとえば、一年生の生活科のあさがおの観察では、これまで観察カードを持って、あさがおの双葉と本葉の違いを手で触って「つるつるしてる」「ざらざらしてる」「毛が生えている」と、みんなでわいわい言いながら、形のちがいがよく見て、紙に鉛筆で一生懸命スケッチし、色鉛筆の緑や黄緑、黄色も使って、色の違いもなんとか表現しようとかんばる光景が普通に見られていました。スケッチの下には文章で書くスペースも設け

られているので、覚えてたのひらがなを使って、気づいたことを文章化する国語の力も育てることができました。子どもたちは自分の五感と脳みそをフル回転し、友だちの発見や表現にいい刺激を受けながら、高度な学習をしていたのです。しかし、最近では、タブレットで撮影してそれを電子黒板に写して、気づいたことを発表して終わりという学習要素ゼロの「学習活動」が平気で行われています。たしかに「効率」はものすごくいいです。写真を撮って見せるだけですから、学力格差も関係なく、授業は「はやく」終わるでしょう。スケッチや文章表現が苦手な子にとっても写真を撮るだけなら「かんたん」だし、指導もほとんどいらす。教師にとっても観察カードに書きせるのに比べてはるかに「らく」です。しかし、そこには授業とって一番大切な「深い学び」や「成長」という視点が決定的に欠けています。そこにあるのは、工場における大量生産と同じ発想です。学校は工場ではないし、子どもたちは工業製品ではないのです。教師の責任は「授業をする」ことではなく、子どもたちの深い学びを実現

し、「成長させる」ことではじめて果たされるのです。「はやい」「かんたん」「らく」だけでなく学びのない授業は栄養価ゼロでカロリーばかり高いスナック菓子と同じです。おなかはふくれても栄養失調で死んでしまいます。もちろん、雲の動きなど、タブレットで写真をとって比較することのメリットがある場合もあります。大切なのは、タブレットを使うことが子どもたちたちの成長にとってプラスになるのか、マイナスになるのかを見極めることなのではないでしょうか。そして、マイナス面が大きいと判断したら、それがどんなに「はやい」「かんたん」「らく」なことであっても、タブレットは使わないという決断を下す勇氣を持つことがタブレット時代に生きる教師の責任なのではないでしょうか。子どもたちは「時間がかかっても最後までやり遂げようとする」から成長するのです。「難しい」ことに挑戦するから「できた！」という達成感が得られるのです。「しんどい」ことに取り組むからこそ、飛躍が生まれるのです。そこに「ほんもの」の学びがあり、「どの子もき

たえる」という教師の本気の熱意があれば、

子どもたちは「時間がかかる」ことでも、「難しい」ことでも、「しんどい」ことでも嬉々として取り組み、仲間と共に、快適な情動を感じながら、飛躍を勝ち取っていくのではないのでしょうか。

タブレット学習のもうひとつの大きな問題点は、子どもたちを分断し、「共同」を破壊するということです。もちろん、使い方によっては、子どもたちをつなぐツールになることもあります。タブレットは基本的に個別学習を可能にするという点で個別最適化を促進する危険性があります。私は、教育とは「模倣と共同」であり、「おとなりさん」を見て、まねして、いっしょに取り組み、教え合い、助け合い、認め合い、成長を喜び合うことで、その教育的効果は何倍にも高まると考えています。特に低学年の場合、大きな学力格差があるので模倣と共同なくして一斉授業は成り立たないと言っても過言ではありません。タブレットによる個別学習は、模倣と共同による豊かな教育の可能性を捨て去り「個別最適化」と聞こえのいいことを言いながら、その実態は子どもたちの学力格差を「個性」

や「自己責任」であり「しかたないもの」ととらえ、「できる子」はどんどん伸ばし、「できない子」はそれなりにやってくれればいいという発想なのです。これでは、子どもたちの学力格差は解消されるどころか、どんどん広がり、世代を超えて固定化されていってしまいます。いま大切なのは、タブレットによる個別学習ではなく、「おとなりさん」との豊かな交流です。私は、国語でも算数でも、一時間に一回は「おとなりさん」とのペア学習の時間を設定しています。そして、子どもたちには「学校はみんなでかしくなるところだ」という話をしています。学力格差は「自己責任」でも「しかたないもの」でもありません。一斉授業と個別指導によって解消に向かわせることができるものであり、その原動力が「模倣と共同」であり、「おとなりさん」との豊かなつながりなのです。

個別学習によって子どもたちを分断する教育に未来はありません。タブレットは、うまく使えば便利な道具ですが、子どもたちを分断する「凶器」にならないよう、注意深くつきあっていきたいと思えます。

タブレット学習で失ってはいけないもの

春日井学力研 小川慶子

便利って…

「手洗いの水が出しっぱなし、トイレの水が流されていない」

コロナ前の四月の光景です。新一年生の仕事です。便利な設備の整った家庭や幼稚園、保育園の出身者にとっては、「蛇口をしめる」「水を流す」という動作は不要だったに違いありません。コロナ以降、学校でも自動水栓が導入されましたので、最近は見かけなくなりました。しかし、蛇口の最後の一締めが難しいことには変わりありません。

便利なことはありがたいのですが、それと引き換えに失うもの(子どもたちなら育たないもの)があるはずですよ。

学校は教育の場

タブレット一人一台により、これまで「で

きたらいいな」と思っていたことがいくつも実現されました。しかし、子どもを取り巻く環境がいくら便利になっても、失ってはいけないことがあります。学習に限定すると、次の三つです。

○書くこと

○じっくり取り組むこと

○仲間と対面して話すこと

学校が教育の場である以上、この三つは、失うどころか、しっかり身に付けたい力です。

書くこと

岸本裕史先生が「書くことは学力の下限を規定する」と言っておられました。学力をつけるには欠くことができない活動です。昨年度に引き続き今年度も三年生を受け持っています(私の勤務校だけかもしれませんが)書く力(速度・文字の形など)が

残念な状況にあります。文字を書く機会が少なく、鍛える時間が十分でなかったのではと思います。こういう状況にある子どもでも、キーを押すだけでタブレットに入力させれば、短い時間に見栄えのするものができるのかもしれませんが、本当にそれでよいのでしょうか。

児童かきかた研究所の高嶋諭先生に合理的な(余分な力を入れず鉛筆の可動域が大きい疲れない)鉛筆の持ち方を伝授していただいたり、久保田競先生に手と脳の関わりについて教えていただいたりしたことを考えると、せっかくの脳を鍛えるチャンスを潰しているようで残念に思います。

じっくり取り組むこと

子どもたちは、すぐに結果が出る活動が大好きです。一問一答形式の問題をして、即座に採点され結果が出る学習は、子どもの意欲を高めるにうってつけの学習と言えるでしょう。

以前、コンピュータに堪能な先生自作のソフトを同じフロアの一年生がやっていた

した。(一けた)+(一けた)の問題の一分間チャレンジです。正解するとチャイムが鳴り、一分経つと正解数と誤答数が表示されます。子どもたちは喜んで取り組んでいました。これを個別最適化というのかもしれませんが、あまりにうるさく、ゲームに近い感じがしました。

気をつけたことは、教材の与え方です。学力研で取り組む百マス計算も同じ計算練習です。一人ひとりが「昨日の自分に勝つ」という目標をもって取り組み、自分の成長を確かめられるというのは同じです。違っているのは、静かな鉛筆の音がするだけの空間で、集中して問題に取り組み、自分だけでなく仲間の成長も認め合い喜び合えることです。これが学級づくりにも役立ちます。意欲を高めるだけでなく、じっくり考える本物の力をつけることも大切にしたいです。すぐに答えが見つからないと、途端に投げやりになったり、考えを文章化することが「面倒くさい」と言って取り組まなかったりする子どもが目立ちます。また、イン

ターネットを使って調べ学習をしても、丸写しで力尽き、難しい言葉を国語辞典で調べて内容を理解するところまで育っていない子どもも多数います。

タブレット学習を支える基礎学力をつけることや国語辞典を引く機会を増やすことなども必要です。

仲間と対面して話すこと

コロナ禍により、私たち大人もオンラインで研修をしたり、学習会に参加したりする機会が増えました。コロナが5類となり、対面が再開されて感じたことは、オンラインでは感じられない対面のよさです。その場の雰囲気や話し手の感情などが伝わり共感しやすいと感じました。

子どもも同じです。せっかく毎日登校したくさんの仲間に出会うのですから、授業だけでなく、休み時間や給食・清掃の時間などにできるだけたくさんの会話をしてほしいです。

公立の小学校はいろいろな子どもがいます。単語の羅列ではなく、なるべくきちん

した、相手に分かりやすい話し方で交流するようにします。学校はお互いを理解するにはどうしたらよいかを考え実践する良い場所だととらえてほしいです。

スマートフォンを手にする前に、ぜひ経験してほしいことです。

バランスよく

学校に登校して学習するのは、子どもたちです。育ち盛りの子どもには身に付けないではない課題がたくさんあります。

単に、「楽だから」「便利だから」という理由でタブレット学習を何でもかんでも取り入れるのではなく、育ち盛りの子どもたちに何が必要で、何が必要でないかを考えるとともに、タブレット学習を支える基礎的な力を身に付けさせるようにしたいと思います。

さらに脳とタブレット、脳とスマートフォンの関係についても理解を深めたいと考えています。

子どもの発達に資するのは ――人――端末 その功罪――

加印いろえんぴつ 岸本 ひとみ

○魅力的な道具です

タブレットはたいへん便利な道具です。私の勤務する地域では、子どもたちは、chromebookを使っています。今のところ、クラウドの容量は無制限なので、低学年時に作成したプレゼン資料などのデジタル作品を、上手に保存しておけば、卒業時まで見ることができると思います。使い始めて、これで5年目を迎えることになりましたから、来年になれば、1年生時代のものを見て、自分の成長ぶりを確認することができるとしよう。

Google foamの作成や使い方を指導しておけば、国語や社会科、総合的な学習などで、アンケート資料が必要な場合、簡単に集計することもできます。スライドや文書の作成もお手のもの。

子どもたちが何より喜んでいるのは、板書したものを写真として保存しておくの

で、委員会活動の記録が簡単にできることです。教員も、欠席児童への連絡とともに、板書の写真を届けて、学習進度を知らせることもできます。

○とにかく使いの実態

反面、これはどうなの？という使い方を目にするのもけっこうありました。

◇低学年が、ローマ字入力をしている。

◇高学年なのに、きちんとした検索の仕方を指導されていないため、調べものの結果に差が出てくる。

◇休み時間にも「桃鉄」をしていて、次の授業準備がおろそかになってしまふ。

◇一斉指導中に、個別の作業をしていることに気がつきにくい。

これらは、たぶん、ここ数年で自然淘汰さ

れて、年間カリキュラムの中で、どう使うかが定まっていくものなのだろうと予想します。

ただ、現時点の小学生が、間違った使い方を身につけてしまったものを取り戻すことは、たいへん難しいでしょう。特に、家庭に持ち帰って使える設定にした場合、学習以外のことに使える抜け道はいくらでもあるわけですから、あまり感心しない事態や、育ちようをしてしまう危険性を孕んでいます。

○デジタル格差が広がる

「夜、9時以降は端末は使えません。」このような設定になっているのは、全国的にはレアなようです。学習に使えるアプリは、9時以降になると使用不可になってしまうよう設定されているのです。

小学校5校、中学校2校しかない小さい教育委員会が契約している管理会社なので、不正使用の頻度が高くなると、すぐに連絡があつて、端末番号から個人が特定できる仕組みになっています。

そんなシステムを持っている地域でも、

家庭に持ち帰ることができるようになったために、生活時間の使い方が大きく変化していることは否めません。スマホ依存症ならぬ、タブレット依存症ではないかと思われる小学生が続々と現れています。

自分で時間の管理ができない年令の子どもたちです。また、保護者の方も、タブレットを使っていると学習が進んでいるのかのような錯覚に陥って、なかなか制止できなくて、どんどん深みにはまっていつている子どもの事例が増えてきました。

この子たちが、青年期を迎え、大人になる頃には、いい意味でのデジタルネイティブと、依存症との2極に分かれて、ますます格差が開くことが予想されます。10年後、20年後を考えると、心が重くなってしまうと思います。

○脳が『虫歯』？

低学年時からタッチペンを使って「かな入力」に慣れてしまうと、正しく鉛筆を持ち、姿勢を保持しながら、集中して視写をする、というような学習を厭うようになります。

「めんどく。」

「写真で撮ったらええやん。」
となってしまうのです。

40年前に「手が『虫歯』」という言葉が流行りました。家庭で便利な電化製品が普及して、子どもたちがあまり手仕事をしなくなったために、不器用になってしまったことを表現したものでした。

今は、「脳が『虫歯』」ではないでしょうか。YouTubeを見ると、楽しい動画がたくさん配信されています。保護者のスマホでそれを見ているとおとなしいため、ついついそうしてしまいがちだと、困り顔で訴えてこられる方もあります。

それが、そのままタブレット端末の使用に受け継がれていったとしたら、どうしても受け身になってしまいます。確かに、動画を視聴することは楽しいです。ですが、それだけでは、誰かとコミュニケーションを取ったり、話し合ったりすることがおっくうになってしまいうでしょう。

今の子どもたちを見ると、まだZoom会議をしていることが、まじに見えてしまいます。直接的なコミュニケーション

ではないのに、です。

○苦手な教員の退職が続く

職場を見ると、30代より若い先生方は、タブレット端末を使うことにもさほど抵抗なく、スムーズに移行していかれています。40代だと、半々ぐらい。そして、世代的に、一番人数の少ない50代の教員では、なかなか手がつけられていないという人がけっこう多いのです。

「何か、何でもタブレットで、って言われて嫌になったから、辞めることにしました。」

「時短勤務でもいいから残ってほしい、と言われたけど、タブレットの使い方があんまりよくわからないので、断りました。」

という、定年間近の方を見ると、丁寧な指導をされていて、力量には定評のある人なのに、という場合がけっこう多いのです。人手不足、ブラック職場にとって、なくてはならない人たちが、タブレットの導入を機に辞めていく、何とも皮肉なことですし、残念なことでもあります。

理科だからこそ理由を書かせる

国語・算数・理科・社会。

代表的な四教科だが、仲間はずれの教科がある。それはどの教科で、なぜなのかの理由を書けるだろうか。

それぞれの教科に「〜科」をつけると、

どの教科が仲間はずれなのか、見えてくる。

国語科・算数科・理科科・社会科。

「理科科」は変。（仲間はずれば「理科」）

国語科から「科」をとって「国語」なら、理科から「科」をとると「理」となる。

それゆえ、国語・算数・理・社会と明記しないといけないわけだ。

理科を最初に教える時、子どもたちには、次のように言っている。

「理科は、理由を考える教科です。」

理由を書かせる・六年生編

六年理科「動物のからだのはたらき」（東京書籍）の第一時。

右記のタイトルを板書した後、「動物」の下に（ヒト）と書き足した。

「教科書には動物と書いてありますが、ほぼヒトについて学習していきます。」
「なんだか「ヒトも動物である」ことがピンとこない子もいた。」

【板書】

「ヒトが生きていくために必要なもの」

最初は、一分間で書けるだけ書かせ、次にその中から一つ選び、
「それがないと困る理由を書きましょう。」と、指示した。

【養分】 エネルギーがとれなくなる。

【血】 手術でもよく輸血してるし、血がないと人は生きれないから。

【血液】 体の中の臓器を動かせなくなるから。
血液がないと体がペコペコのペコペコになってしまうから。

【小腸】 養分が取り入れられなくなるから。

【ほね】 ほねがないと歩けないから。

【胃】 食べ物が消化されないから生きていけない。

【舌】 食べ物の味がわからない。
【白血球】 体の中に入ったバイキンをたおす働きがあるから。

【脳】 からだに信号を送れなくなり、血液がまわらなくなったり、心臓がとまったりしてしまうから。

【こまく】 おとがきこえなくなる。おとがきこえないからかいわができない。きこえないとくるまのおとなどがきこえない。

【空気】 空気がないと呼吸（息）ができなくなるから。
空気がないとちっそく死するから。

【酸素】 人間は息を吸って吐くと言う作業をくりかえしており、息が出来ないとちっそく死してしまうから。

【宇宙】 宇宙がないと酸素もすえずになにもできず亡くなるから。

【お母さん】 困った時、たすけてくれる。
【お父さん】 ゆうきをくれる。

【森林】 木は二酸化炭素をすってくれて酸素を出してくれるけど、このまま二酸化炭素がふえつづけると呼吸ができなくて、生きられないから。

【植物】 酸素がつくられないから息ができない。

「家」家がないとねる所もなにもないし食料や水を保かんでできないから。

「衣類」冬だところこえ死ぬから。

「服」さむいから。

「衣食住」服がないといやだし食べ物がな
いと生きていけないし住まな
いとキツイ(夏とかとくに)。
「スマホ」ニュースもみれる。そして天気
も確認できる。

「すいみん」脳を休めれないから。

「命」命がないと生きていけないしなにも
できないから。

「地球」宇宙では息ができないから、生き
ていけない

「食料」力がはいらなくなってしまうから。

「たべ物」なにか食べないとえいようがと
れなくなるから。

「水」体の作りができてても生きていくた
めの一つで水がなければ、ねっちゅ
うしようとかになつたり水分がなく
て亡くなるから。

「土」植物がうえられず酸素をえられない
から。

「お金」水や食料、家などをかうため。

「知え」食料や水の確保の仕方もあるし、
新しい知しきをたくわえられる。

今回は、あるクラスの板書された理由を
あますことなく紹介した。

どの理由がとは言わないが、あきらかに
学力的に低く、理由が理由となつていない
ものもある。

理由は、論理的で、納得できるものでな
ければ、理由として成立はしない。

でもいきなり、そんな理由を書くのは、
大人でも難しい。

とにかく、理由を書かせる。
そんな場を多く取ることが、最初の一步
となるのではないだろうか。

理由を書かせる・五年生編

五年理科で、インゲンマメが発芽する様子も動
画で視聴させた後、「種子が発芽する条件」を一
分間(さらに一分間追加)で書けるだけ書かせて
発表させた。

【板書】水・空気・温度・土・ひりよう・日光・
虫よけ・入れもの・人の手

「この中で、発芽には必要ないものを選んで、ノ
ートに理由を書きましよう。」

書けた子からノートを持ってこさせ、各条件で
二〜三人ぐらいまで板書させた。

【土】・たださきさるだけで別に土がなくても根
は育つから
・水だけでも発芽するから

【人の手】・人の手はぜつたいにいるわけない、
そのままうえればいい。
・他の道具でいろいろできるから。

【虫よけ】・虫がいても育つから。
・べつに虫がこないとこころにうえれば
いい。

【日光】・土にいるときは日光にあたらないけど、
成長しているから。
・本々種子は土の中にあるから、日光が
とどきにくくても発芽する!!

【入れもの】・カップがなくても、花たんなどで
育てれるから。
・そのまま土に種子を置いて、発芽
(成長) するから。

【温度】・水や日光や空気があるから温度がいち
いち変わつてしまつから。
【ひりよう】・種に栄養があるから。
・栄養を与えるのは発芽したあとで
いいと思うから。

【空気】・土の中は空気がないから。
板書された理由と違う理由を書いている子に
も発表させた。

最終的に、水・空気・温度(適温)は、必要た
らうということになり、それらが本当に必要など
うかを確かめる実験をすることになった。

このように、いろんな場で、理由を書かせ、考
える力をつけていくのである。

一、授業のすすめ方（続き）

「学校の校舎や校庭などの大きさと比較し、古墳の大きさを具体的にとらえさせるようにする。」と指導書にありましたね。それをどう指導するのか。

かつて、学校現場では、拡大投影する機器として、OP（Over Head Projector）が使われていました。OPのステージガラスの上に載せる「P」（トランスペアレンシート）がありました。学校の校庭図面と大仙（仁徳陵）古墳の図を同じ縮尺にコピーします。古墳の図をトラペンシート（現場ではこう呼んでいました）にコピーして、OPの上で重ねて子どもにも提示していました。今はそんなことしなくて便利ですね。Googleマップなどを使って簡単に重ねることがができます。

ここで指導のポイントを教師が校庭図と古墳図を重ねて、「こんなに大きいね。」と

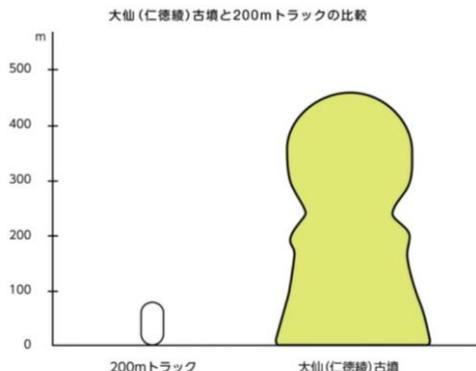
説明してしまうとだめです。「具体的にとらえさせるようにする」にはどんな工夫があるのでしょうか。まずは、学校の校庭図を渡して、大仙古墳を学校と比べてみて、どれぐらいの大きさかと思うかを図に書かせ

ます。（学校規模によっては、学校周辺も含みます）外側の図（つりがね型）を示して、鉛筆で書きます。「つりがねのような形を古墳はこれぐらいの大きさだなどと思う大きさを書いてください。」と説明します。自分のイメージしている大きさをプリントに書くことで可視化します。その過程で思考が働きます。身近な自分の学校の大きさと比べることで、巨大な大きさを具体的に実感することがができます。

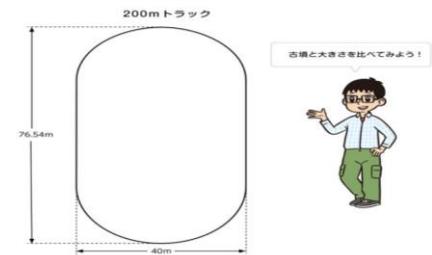
今年4月から小学校では、教科書が新しくなりました。どのページにも男コードがついています。開いてみるとこんな図がありました。使えますね。でも子どもにた

だ見せるだけではなく、教師がリードしながら使いたいですね。

だいせん にんとくてんのうりよう こふん
①大仙（仁徳天皇陵）古墳



だいせん にんとくてんのうりよう こふん
①大仙（仁徳天皇陵）古墳



男コードで開いてみてしまうと、すぐに答えが分かってしまいます。自分の思考をくぐらせることが重要です。次に、教師：「大仙古墳は真上から見るとこんな形です。」とパワポで示します。



「図形でいうと、どんな形に見えますか。」

子ども：「Oと□です。円と四角形」

教師：「四角形のことを方形といいます。」

正方形、長方形と使うよね」

教師：「こういう形をしている古墳の形を前方後円墳といいます。」

広さはこれで実感できたと思います。高さも実感させたいものです。ここでは、教師から示します。

教師：「高さは約35メートルです。ビル

の十一階と同じです。みんなの学校の校舎は4階なので、学校の校舎3個分よりも一階分小さいぐらいなんです。パワポで示します。

子ども：「山みたい。」

教師：「山のように高く、広い古墳。こんな大きな古墳を見て、みなさんはどう思いますか？」

子ども：「でかい。どうやってつくったんだろう。」「だれのお墓なんだろう」など意見がでます。

教師：「そうですね。こんな大きな古墳がつくられた世の中はどんなようすだったのだろうね。」と今日のめあてを貼ります。

めあて 古墳がつくられた世の中はどんなようすだったのだろう

教師：「この古墳には大王（のちの天皇）がほうむられていると言われます。」

みなさんもお葬式の際に、「かんおけ」

の中に亡くなった人が好きだったものを入れたり、最後にたくさんのお花を入れたりしたこと見たことあるかな。大王も自分のひつぎ（かんおけ）に、大事なものを入れました。古墳では、むずかしい言葉で副葬

品（ぶくそうひん）と言います。

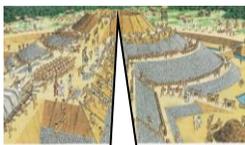
どんなものを一緒にいれているか見てみましょう。教科書の図をみます。



黄金の冠・鉄の刀・鏡・黄金のくつは書いています。子どもは、かみかざり・服・こしひも・金のつえなど見つけます。かんおけが赤くぬられていることに気がつく子どもいます。

教師：「この柩（ひつぎ）は、古墳のどこにいれるんですか？班で相談してください。」

予習してきた、「古墳づくりのようす（想像図）」の絵図から、場所をさがします。予習で見つけている子どももいますが、教師に問われることで、より絵図を見ます。



部分の
円に、
様子
が描か
れてい
ます

神奈川学力研の紹介

神奈川学力研 湯浅 文
新倉 智行

神奈川学力研は、2ヶ月に1回、日曜日に例会を行っています。メンバーは、バラエティーに富んでいます。小学校の教員や中学校の教員、学習塾の講師など現役で教育実践に従事している人達だけではなく、実践活動からはリタイアしている人もいます。例会では、様々な視点から意見が飛び交うので、大変勉強になります(テーマから脱線してしまうこともあります)。今回は、この約1年間、神奈川学力研の例会で話し合った内容をご紹介します。

① 二〇二三年三月五日の例会

岸本先生の『見える学力・見えない学力』を読んできることになっていたので、1人1人、読んだ感想を発表しました。すでに何度も読んだというメンバーが多かったのですが、改めて読んだ感想を発表し合うと、新たな発見に気づくこともありました。特に、音読のよさや音読の効果について考えを深めるきっかけになりました。

② 二〇二三年五月十四日の例会

「音読は何のために行うのか？」をテーマに話し合いました。メンバーの1人である学習塾の講師が、「音読は、読解力向上のための手段と考えている。あくまでも目的は読解力の向上であり、音読は手段

にすぎない。」と発言すると、別のメンバーから「しかし、音読ができるようになったからといって、読解できるようになるとは限らないのではないか？」という意見が出たりしました。また、「音読が上手くできなくても、文章の内容を読解できる児童・生徒はいるのではないか？そのような児童・生徒には音読を練習することは必要なのではないか？」といった問題提起も出ました。これに対し、「¹⁶音読できるようなことになること、それ自体が重要な¹⁶点である。たとえば、社会人になってから大人¹⁶にプレゼンテーションするときに必要なスキルであり、それは、読解とは関係なく、重要である。」という意見が出ました。

別のメンバーである学校の教員から、国語の授業のなかでの音読の位置づけについて、発言がありました。それによると、「国語の授業の中で音読をどのように位置づけるかは、個々の教員の裁量に委ねられており、たとえば、演劇的な色彩の強い国語の授業の中では、音読が、レクリエーショナルな要素の強い活動として行われている」という興味深い見解も出ました。他にも、「最近、日本語のできない外国人生徒やここに問題を抱えている児童・生徒が、

普通学級で授業を受けており、そのような児童・生徒に対し、いわゆる「取り出し」をして、個別に音読指導することは、日本語に慣れさせる、またはこのころの問題を改善させる、という意味があるのではないか」といった意見も出ました。

③ 二〇二三年七月九日の例会

「小学校の国語の授業では、どのように音読の指導を行っているのか？」について、「大造じいさんとガン」の指導計画例をもとに、メンバーで話し合いをしました。ところが、その指導計画例は、全面的に音読の指導を行っているような指導計画例ではありませんでした。どちらかというと、「大造じいさんとガン」を素材として論点の話し合いをすることを重視するような指導計画例でした。たとえば、その指導計画例のなかで、「大造じいさんの残雪に対する見方が変わったところを考え、話し合う」という指導が出てくるのですが、メンバーである小学校の教員からは、「このように、授業の中で児童同士話し合わせることも、指導計画で想定するような結論に至ることは稀で、実際には教師が誘導することが多い。上級レベルのクラス(たとえば、国立大学附属小学校のクラス)では、このような話し合いはできるが、中級レベル以下のクラスでは、なかなか難しい。」という意見が出ました。この意見に対し、別のメンバーである学習塾の講師は、「指導計画例の意図どおりに授業を進めるには、児童のレベルを上げるしかないのではないか？そのためには、読解の『型』(＊)

を生徒一人一人に教え込まなければならぬ。塾ではこれを、音読を通じて行っており、算数の指導と同じように国語も指導している(公式を教え、公式に当てはめて問題を解かせるように)。という意見が出ました。この意見を受けて、別のメンバーで、元小学校の教員で現在は学習塾を運営しているメンバーから、『大造じいさんとガン』をどのように扱うか』をテーマに、その学習塾で行われている具体的な実践についての発表がありました。

*読解の『型』とは、文章読解のコツのようなもの。たとえば、指示語の内容はその指示語より前の文章に載っている、というようなこと。いわゆる国語のワークブックの問題を丁寧に解くことで身につくものと思われる。

④ 二〇二三年九月三日の例会

この日は、(一) 研究授業における「大造じいさんとガン」の指導案と(二) 読み深めの実践例をもとに、音読と読解の指導について、さらに理解を深めていきました。(一)では、2つの研究授業における「大造じいさんとガン」の指導案をもとに、メンバーで話し合ったのですが、指導案全体から受ける印象について、あるメンバーからは、「中程度の学力を有する児童でも、この指導案の内容では、ついていくのが難しいのではないか?」といった意見が出ました。また、指導案のなかで、児童に、大造じいさんの性格に関し具体的な発言をもとめる発問がある

のですが、この発問について、あるメンバーからは、

「発言の内容うんぬんというよりも、発言すること自体がディスカッション能力の向上に繋がるので、幼稚な内容でもどんどん発言させた方がよい」という意見が出ました。この意見を受けて、「しかし、幼稚な内容の発言のままでは、読解力の向上には繋がらないのではないか?」という意見もありました。

また、別のメンバーから「文章の内容を読み取る力、特に、文章の中から児童自身の発言の根拠となる内容を読み取る力を身につけさせるには、どのような指導をしたらよいか?」という問題提起があり、この問題についてみんなで話し合いをしました。

(二)では、元小学校の教員であるメンバーから、小2の教材である「アレクサンダーとぜんまいねずみ」を素材として「声優ごっこ」や「ラジオごっこ」を通じて音読させるという読み深めの実践例がありました。この実践例では、文章全体の「理解につながらず」という意味では、読解につながらず、主題の読み取りまではもとめない、スジがわかればよいという点が、印象的な実践例でした。

⑤ 二〇二三年十一月二十六日の例会

この日は、今まで話し合ってきたテーマである「音読と読解」について、これまでの話し合いを踏まえ、メンバーがそれぞれ見解を述べることになりました。元小学校の教員であるメンバーは、「音読がスラスラできるようなれば、ある程度、文章の内容は理解できるようになる」という見解を発表しました。

この見解を聞いていた別のメンバーが、「スラスラとはどの程度のレベルか?」と尋ねると、「たとえば、『ぜん・ん・か・い・の・ふ・り・か・え・り』と音読している生徒に対して、教師が『ぜんかいのふりかえり』と範読する。そして児童・生徒に同じように音読するように指導する。これを繰り返すことで、児童・生徒が『ぜんかいのふりかえり』と読めるようになる。このレベルに達すれば一応スラスラできるようになってきたというレベルに達したといえるのであり、さらに必要であれば、教師が、『ぜんかい』と『ふりかえり』の意味を説明し、さらに繰り返し音読させることで、内容の理解も深まってくるであろう。」と、元小学校の教員であるメンバーは答えました。

別の、現役の小学校の教員であるメンバーは、次のような見解を発表しました。「音読は目的が大切である。コミュニケーション力の育成を目的として音読を指導するのであれば、とりあえず声を出させる指導になるであろうし、文章内容理解を目的として音読を指導するのであれば、上記の見解にあがっているような指導になるであろう。いずれにせよ音読は、国語の指導において重要であり、必ず行う必要がある。最近では、学校現場に外国人の生徒が増えてきており、このような児童・生徒に対する指導でも、音読は必要な指導である。」

局長だより 6月

◇学力研最新情報 岸本ひとみ
●全国フォーラムへどうぞ

記念講演 榑 浩平さん

著書を読まれた方は多いと思います。これまでの講演会の演題に、「スマホ・読書と学力の関係」や「脱スマホプログラム」など、たいへん現代的な課題について研究しておられることがわかります。

東北大学の方ですので、関西においていただく機会はありません。今回、ライブでお話が聞ける脱スマホプログラムは、私たち学力研にとっては、たいへんありがたいことなのです。

おそらく、会員以外の方の申し込みも多いと思います。早めに申込されて、参加費を振り込んでいただくことをおすすめします。会場定員は150名です。

●午前 低・中・高学年別講座 & 中学・高校・家庭教育分科会
4日の午前中は、学力研の誇る実践を、子どもの実態をふまえてお伝えします。2学期からさっそく使える実践も多く提案されます。会場参加の方には、お土産もあるかも。そして、関連書籍の販売もします。

オンラインの方には、チャットで資料データをお届けできます。(そのため、できるだけPCでzoomに参加していただくとありがたいです。)



オンラインの方には、チャットで資料データをお届けできます。(そのため、できるだけPCでzoomに参加していただくとありがたいです。)

◇事務局だより 岡本 美穂
●春の先生のための学校 終了
感想紹介します

質問にも答えてもらえるのが講座の良さです☆

・ありがとうございます!

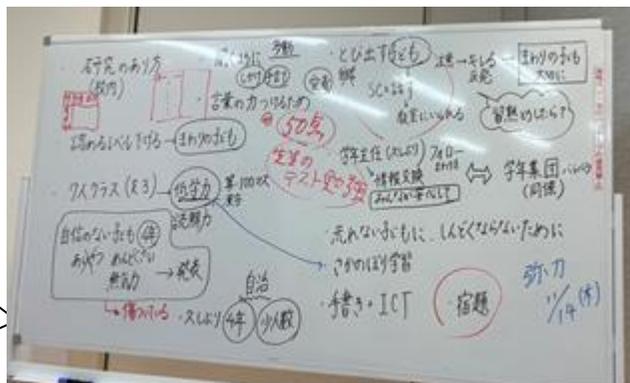
対面講座で宮川先生と久保先生の話聞いてめちゃめちゃよかったです! そのあとのお茶しながらのお話のなかでも深い話を聞くことができました。教育とはどういうことか忘れかけていた大事なことを思い出させてもらえました。

5月のこの時期にもう一度自分の学級を振り返り、修正します! 不易なものを守るよう学び続けたいと思います。

ありがとうございます😊

・やっぱり対面の学習会はいいですね。実感しました。具体的な質問が、山ほど出てくる。

ニュアンスも伝わるし、話している側も、反応がよくわかって、いいと思いました。



対面講座の良さ

即座にフィードバックを受け取ることが可能で、表情や身振りを通じての非言語的なコミュニケーションも学びの一部となります。

学力研カレンダー



《各地のサークル・部会 2024年 6月 例会、イベント》

どなたでもご参加いただけます。お誘い合わせのうえお越しください。お待ちしております。

※会場等使用状況により、変更の可能性もありますことをご了承ください。

6/

- | | | | | |
|--------|-------------|---------|-----------------|---------------------------|
| 15 (土) | みなみ学力研 | 9時半～12時 | 阿倍野区民センター | 図書 nobu580701@yahoo.co.jp |
| 28 (金) | 春日井学力研 | 18時半～ | レディヤン春日井(JR勝川駅) | 山口 080-6904-1697 |
| 28 (金) | いろえんぴつ (加印) | 18時半～ | 天満南小 サークル室 | 岸本 090-9117-6330 |
| 29 (土) | 大阪教育サークルはやし | 午後 | エルおおさか | 荒井 aik28501@bca.bai.ne.jp |

オンライン開催のサークルには、参加方法を連絡先にお尋ねください。

下記サークルも活動していますので、翌月以降の日程のお尋ね等のご連絡下さい。

- 神奈川学力研 10時～12時 県民サポートセンター704号室 (横浜駅西口) 湯浅 090-1104-4667
- 伊丹学力研 18時半～ ※阪急武庫之荘駅近く 前田 090-9715-3830
- 持ち方書き方研究会 ライン会議で行います。日時や参加のしかたはご連絡を 前田 090-9715-3830

《全国キャラバン等 今後の予定》

★ 学力研 全国フォーラム 8/4 (日)

分科会 低・中・高学年・中高家庭教育

記念講演 榊浩平氏 「スマホはどこまで脳を壊すか」 会場：ドーンセンター
近日申し込み開始

(詳細はメルマガ「まぐまぐ」、「こくちーず」などで)

(講師派遣希望、サークル情報などは 事務局へ 079-426-5133)

早いものでもう2カ月が過ぎて6月に入りましたね。よく「6月危機」と言われるように、学級が荒れやすい時期です。悪気候の影響を受けて体調を崩す子どももいます。こんな時期こそ、学力の基礎を凛々しく鍛え、心地よさを大切にされた学級経営で乗り切りましょう。何より、先生方が健康で元気であることが大切だと思います。皆様それぞれお忙しいことと思いますが、がんばりましょう。(堀井)

ご意見・ご感想は下記まで

- | | |
|-------|-------------------------------|
| 荒井 賢一 | E-mail aik28501@bca.bai.ne.jp |
| 李 詩愛 | E-mail iwamotoshie@gmail.com |
| 堀井 克也 | E-mail katsuya4k1h9@gmail.com |